

蒸気が立ちこもり上の樽へ上昇していく。中樽のところにいる者が腰かけて坐れるようになってゐる。全体の高さは二四九センチ、樽の接合部は上が七四、下が七六センチである。(内藤記念くすり博物館のご教示による)

このような蒸気風呂を作るヒントとして、才一に「らんびき」の構造図を、才二に梅毒における水銀燻蒸法の図を予想しつつ、バルベツティ・アペリウスの著書を探求した。

昭和五十三年編の『東京大学総合図書館古医学書目録』。片桐一男氏調査の『京都大学図書館所蔵蘭書目録』。宮下三郎氏調査の『日本語に翻訳された蘭文医書の目録』。昭和五十一年調査の「江馬文書目録」に眼を通したが発見出来なかつた。また岐阜県歴史資料館、友人の江馬 恭(八代目に当る)医師にも問合せたが存在を確認できなかった。

岐阜県の白木 茂氏が述べている如く、「東京帝大に寄贈された江馬家の蘭書は、関東大震災で焼失した」ので、バルベツティなる書は其中に含まれていて、平成八年現在、存在しないと考えられる。従つて、ヒントになるような図については不明である。

江馬蘭齋による晩期梅毒の治療について、青木一郎氏が次のようにまとめている。

- A. 蒸気風呂 (蒸気浴)
- B. 内服剤 (蜀葵根、大黃、硫酸曹達、甘草を処方)
- C. 蒸気風呂を利用した全身薬浴 (蜀葵根、甘草を用うるも

用量不明)

D. 局所薬浴 (蜀葵根、カミツレを処方)
E. 赤降膏の外用 (特に潰瘍性病変に)

一覽するに蜀葵根が目につく。これはタチアオイの根で、元来はピロウド葵の代用品である。粘液多糖類が多いので和紙を作る際に用いられたが、中国では薬用としない(中国で薬と書くときは、冬葵子=フユアオイの種をさす)。二ヶ月間、中国・成都の蓮花池生薬市場を訪問し、漢方という葵と、蘭方という葵とは異なることを知見した。

蘭方での蜀葵の利用はカスパルの軟膏十七方の中にもみられ、檜林宗建、吉田長淑らが発汗剤、緩和剤として梅毒に用いている。江馬蘭齋の治療は当時としては合理的である。

(平成八年十二月例会)

懸田克躬先生のこと

岡 田 靖 雄

わたしは学生からインターンの時代に加藤正明氏(当時国立国府台病院↓国立精神衛生研究所に兄事しており、つれていかれて先生にもお会いし、先生を兄貴分の兄貴分と感じていた。また、川上武さんが中心でつくった『医療社会化の道標』(一九六九年)に先生の名が二か所にでてくることから先生への関心をつよめた。精神科医療史研究会は一九九一年九月七

日に『流れ流され大学生活五十年』と題するお話しをうかがった(この記録は、研究会の会報につけてある)。報告するのは、このお話しを年代順に整理したものが主である。

一九〇六年一月三〇日仙台市に生まれる。父方は伊達氏の一族で懸田城(掛田、福島市東方)を領していたことがある。

母系が古くからの藩医。結核のため中学四年は三回し、大学卒業まで略血つづく。東北帝国大学医学部三年のとき丸井清泰教授の精神病学講義をきいて関心をもち、一九三一年三月に卒業すると精神科にはいり、講師古澤平作の指導下に精神分析をはじめ。だが、丸井の精神分析が非正統のものであることに疑問をもった古澤は、翌年フロイトのもとにさった。先生は生物学的研究をこころざして、第二生理の藤田敏彦教授のもとで日本語の構音につき研究(これが学位論文となる)。つづいて、伊藤儀助助手とともに家兔の脳波を研究(一九三七年発表)、日本の脳波研究のはしり。

その間一九三四年九月に、衛生学の講師だった坂猶興とともに検挙されて六〇日ほど留置された。坂は東北帝国大学医学部における左翼活動の中心人物で、坂の指示で先生がつくった医師の懇談会が左翼活動の集金組織とみられたのだろうということである。学生時代にも先生は自治会活動をしてきたようである。「社会科学に関心がなかったといえは嘘だが、シンパとまではいかなかった」と自分ではいわれる。釈放されて大学での生活はかわらなかつた。

生物学的研究はつづけたかつたが、生理学の助手になれる

見込みはなかつた。三年下の袴田三郎が東京帝国大学の精神病学教室にはいつていたのにひかれて、一九三七年東京にでてきた。その後数年間に東京帝国大学の精神科に入局した人には、戦後の日本の精神医学をになつた人がならんでいる。なかでも先生がひかれたのは井村恒郎である。翌年、前年に設立された脳研究室(精神科の教授を定年退職した三宅鑑一が室長)にうつり、三宅の精神疾患の家系図調査に従事した。これをまとめたのが鰭崎徹で、先生はそのまともに協力した。鰭崎は、変質可変論や精神軌道学など独自の理論をうちたてていた成田勝郎の協力者で、かれの理論を整理した。先生はこの二人の影響もつよくうけた。先生もこころみた遮断療法(外部刺激を遮断して数日間臥床させておき、次第に心的作業を負荷していくもの)は成田がはじめ、鰭崎が定式化したものである。脳研究室で脳波研究が再開されたのは一九三九年末か。一九四〇年には学生の脳波をしらべている。一九四二年に脳研究室長になつた内村祐之(三宅につづく精神科教授も脳波研究に力をいれてくれた。さらに一九四三年には島藺安雄、鈴木喬が研究にくわわって、脳波研究は本格化した。

一九四五年五月には、秋田県立女子医学専門学校教授生理學、精神医学となり、一九三四年にいつしよに検挙された高橋實(のち全国民主医療機関連合会会長など)ともいつしよになる。戦後にできた労働組合の委員長も「順番で」して、そのとき労働運動の大物ともしりあつた。一九四七年からは脳研究室にすることがおおく、一九四六年からの渡邊宏が中心の

東京精神分析研究会にも参加。

前歴がアカとされていくつかの口がだめになったが、順天堂医学専門学校（精神医学）の大学教授にさいし、一九五〇年四月からその教授（精神医学）。

教室といつても「なにもない」から、街娼やイタコの調査をおこなった。社会精神医学の総説もいくつかかき、戦後における社会精神医学のさきがけの一人となった。「やつぱりわかところからの社会的関心が影響したのだろうね」と先生はいわれた。一九五五年の日本精神分析学会発足時にはその運営にもおおきく関与した。しかし先生は、フロイトのいう心理機制を信じこみはせず、またフロイト学派でもフロイト左派につよい関心をもっていた。

一九六〇年の病院ストライキには順天堂大学教職員組合も積極的に参加し、それをまえに先生は順天堂大学理事（労務担当）となり、つづいて医学部長、学長、さらには順天堂理事長もつとめられた。その間医学教育全般、私立医科大学の運営などに関するおおくの職につかれた。

晩年には日中医学協会の仕事をいれられ、なくなられるまで四年間この会長をされた。一九九六年三月一日死去、九〇歳。

先生は精神分析、脳波研究、社会精神医学の三分野において先達であった。だが、そのいずれにもめりこむことはなかった。その時その時の状況に応じて、もつとも適切な主題をえらんでそれにとりくまれたのだろう（「流れ流され」の意

味）。だが社会的関心は生涯を通じて一貫していたようである。

懸田克躬という人の生涯を通じて、日本の精神医学の重要で興味ふかい断面がうかがあがってくる。それも成田、鯨崎といった非正統の人たちとの接触もふくむものである。先生の生涯は、機会があれば一本の伝記としてかきたいだけの魅力をもつものであった。

（一九九七年一月例会）

***** 紹介 *****

アーノ・カレン著、長野敬・赤松真紀訳

『病原微生物の氾濫』

まずはじめにお断りしなければならないのは、本書が全編にわたって医学の歴史に関連した事項を取り上げているのではないということである。とくに第一〇章以降は、現今世界の医学界で問題になっているおおくの疾患を、現代医学の視点からとりあげている。その点からみれば、医学の領域の業績として紹介すべき著書ではないといえるかもしれない。しかしそれを承知であえて本書をとりあげたのは、それなりの価値をもつものと判断したからにほかならない。そのような批判にもこたえる心づもりで筆をすすめていきたい。